

福岡県八女市・うきは市における茶園農家の意識からみた在来茶園の継承性

佐々木, 一成

<https://hdl.handle.net/2324/7182469>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (芸術工学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名 : 佐々木 一成

論文名 : 福岡県八女市・うきは市における茶園農家の意識からみた在来茶園の継承性

区 分 : 甲

論文内容の要旨

本論文は、岡山県八女市・うきは市における茶園農家の意識からみた在来茶園の継承性を中山間地における在来茶の残存状況を明らかにすることを目的とした論文である。対象地は福岡県八女市黒木町笠原地区、田本地区及び、うきは市とし、資料調査、全世帯アンケート調査、ヒアリング調査、現地調査を実施している。

第1章では、既往研究や資料で、近代のお茶の生産は1950年代頃から機械化に伴い平地を中心に拡大し、1970年代からは生産量の高い栄養系品種の「ヤブキタ」などが増加し、在来茶種は改植されたことが報告されていることがわかった。在来茶は茶園所有者の約22%が所有しており、1950-1960年代、2-3反程度の在来茶の茶園面積が現在1反以下に減少している。また、在来茶の分布は屋敷周辺や山林の傾斜地の他、畑・果樹園の周囲や石垣などに小規模に栽培されていた。元来の茶景観は現在の緩傾斜地ではなく、より急な傾斜地での景観であることを明らかにした。これらの内容は、今後の伝統的な地域景観の保全に資すると考えられる。中山間地における茶業は、昨今、平野部における茶園の拡大を受け、市場の競争が厳しい状況にある。また、市価は、中山間部よりも平地部が先に出荷するため、中山間地が出荷する時期には値が下がるなどの話も聞かれる。近年、茶葉生産の機械化、大規模化が進展する中で、中山間部と平地部の茶の差別化は少なくなりつつあり、中山間地の茶園の存続は、さらに厳しくなると想定される。

第2章では、八女市・うきは市は平成24年九州北部豪雨災害を受け、特に中山間地の被害は大きかった。しかし、実生で生育している在来茶園は、被害がなかった。人口減少とともに、耕作放棄が進むことが想定され、棚田や茶園の生業、景観の保全は課題であることがわかった。茶園景観の特徴として、現代にみる広大な茶園は、戦後拡大してきたことが知られている。一方、戦前までは、小規模茶園が中心で、茶園は住居や集落の近くに設けられていたと言われている。本研究では、八女市、うきは市で散見される小規模茶園に着目し、この茶園景観の文化的な生活環境としての意義を探究し、景観の特徴について検討を行った。茶園と景観の研究は、近代以前の全国的な茶園の景観分類に加え、関西・中部地方における文化的景観や観光の視点から研究が進められてきた。

第3章では、八女市黒木町笠原・田本地区における在来茶園の残存状況および所有者の調査を行った。結果、意識面積の変化は、八女茶の生産は茶業指導所の開設、技術の革新、機械の普及、及び工場の完成で1953-1980年に急速に拡大されていった。現在の栄養系品種の面積は1950年-1960年代の茶園面積と比較すると、6反以上の大規模の茶園が多くなったことが確認された。また、現在の在来茶園の茶園は、在来茶園が1反以下の茶園は80%を占めた。在来茶園の残存が少なく、面積も狭いことが確認された。さらに、アンケートの結果より、在来茶園の所有割合については、在来茶園の所有者は全調査対象の内、3.6%を占め、有効回答者の13.8%を占めた。「現在、茶園を所有している」の回答者の21.7%を占めていたことがわかった。

第4章は、クラスタ結果平均値による景観類型図で、5分類になることがわかった。近代における八女山間部の伝統的な土地利用パターンは平坦地が水田、緩斜面が混植の畑、急斜面が林野、焼畑、茶園とした土地利用であった。現在は、在来茶園を含め、わずかの茶園が急斜面にあり、栄養系品種の多くは緩斜面に移動した。急斜面の茶園の拡大は緩斜面の茶園より難しく、他の作物への転

換も同じく難しいので残存したと考えられる。一方、在来茶園と茶樹は全て他の茶園と接続していて、その内の5件はほかの茶園と田畑と接続していた。その他、在来茶園には、2件が道路と近隣、2件が山林と近隣、1件が住宅と近隣、そして1件が竹林と近隣していた。八女山間部の伝統的な土地利用パターンとして、現在の在来茶園は変わらず田畑と山林との関係が緊密であるとわかった。61軒の在来茶園を所有している農家及び在来茶園を実際に確認でき、クラスタ分析では、在来茶園を有する農家住宅地から在来茶園の距離、標高、傾斜、傾斜角度、傾斜方位、河川までの距離、地理地用状況でクラスタ分類を行い、5つの景観類型にわけることができた。現地視察の結果、地理的特徴については、61件中5件が八女市中心部において家屋の庭木として在来茶園として栽培されていた。また、山間においても茶園と家屋に距離が近いところで栽培され傾斜地にあり、家屋の裏に在来茶園が存在していることがわかった。

第5章では、在来茶園を所有する6軒の農家へのヒアリング調査をまとめると、在来茶園の育成方法では、「実生苗から育成した」が4軒、「山から実を取って植えた」が2軒である。在来茶園を残した理由は、「立地が悪いから」が4軒、「自分が飲みたいから」が1軒、「味が優しく、特徴があるから」が1軒であった。2軒は在来茶園を放棄しており、摘採している農家は4軒あった。そのうち1軒が自家用、1軒が小売り、2軒が農協や茶工場に販売していた。今後の予定について、「そのままにする」が4軒、「品種を切り替える」が1軒、「辞めたい」が1軒であった。ヒアリングでは、1950年代以降、茶工場ができるまでは、小規模生産で集落周辺の小規模園の他、畑や果樹園の周りに茶の木を植えて収穫し、山手では、人工林を伐った後の木庭作や山に茶の実を蒔いて収穫したとの話を聞いた。現地で在来茶園の立地確認した結果、摘採されている茶園は列状に刈り込まれ、立地は傾斜度11-35度以上に分布していた。近年の茶園の立地の傾向が1-25度でと比較すると、より傾斜の急な場所に残されている。これ現在の機械で収穫する営農方法に不適な立地のため、栄養系品種への切り換えが成されず在来茶が残されたこと想定され、平坦地の在来茶園は、1950年以降、機械化により栄養系品種への改植が順次行われたことがわかった。傾斜度のきつい在来茶については、改植が遅れた。これら部分的に残された傾斜他の在来茶園では機械化が進むものの、出荷に至るのは八女地域で61農家に留まり、その他の農家用として消費されるか、摘採されずに放棄されている現状であることが示唆され水稻や畑作に適さない場所で栽培される傾向があったことから、現在よりも比較的傾斜の急な立地や残余地で栽培がおこなわれ、災害時の土留めの役割もあったと推察された。在来茶は実生で直根のため災害時にも強いと想定され、今後の研究課題であることがわかった。尚、ヒアリングの中に、茶園を「ぼこぼこ茶園」、「とんぼどんぼ茶園」と表現されることがあった。茶園の周りに籠と円座で丸くなり、摘める所から手摘みで収穫されたことがわかった。

終章では、当時の茶園の風景が残されていることがわかり、景観類型に基づく継承された在来茶園は、古くから栽培され、長い歴史を経て多様な地域資源を備えてきた住民共通の財産で、その「宝」を台なしにしないためにも、在来茶園は生活文化を示すものでもある。考察として茶園の替植が検討されている。八女丘陵の歴史的風土やそれを包括する在来茶園を日本のすべてのお茶の原点となる日本古来の「在来種の茶」は、生産量も少なく消滅しつつあるが、在来種のすべての茶樹一本一本が世界唯一の貴重な茶樹で在来茶を絶やしてはいけないという想いに駆られる。今後は、十数年で八女地域の在来茶生産はさらに減少することが懸念される。本研究では、今後の在来茶種の保全対策への言及はできなかった。土地利用パターンにより、今後における八女地域のブランド作りと在来茶園の保全にも参考になると期待し、そして、全国の有名な茶生産地についても在来茶園の分布と残存状況を明らかにすることは、各地域での在来茶園の保存に資すると期待している。